

比叡山時報700号 記念対談

「生かされて生く」に生かされて

昭和32年4月に「福聚教会報」として産声をあげた「比叡山時報」は、延暦寺の公式な記録を記すにとどまらず、宗祖伝教大師さまの教えの教化普及、また、比叡山季節の移ろい、またと全国に発信し続け、創刊からはや57年、今月を以て第700号を発行するに至った。

そこで、今月号の特集は、「比叡山時報700号記念対談」と銘打ち、産婦人科医である大阪北野病院院長藤井信吾氏と、天台宗宗議会議長の栢木寛照師の両氏。また、人の誕生から死後観に至るまでの両端の権威者二人に対談をお願いし、人の「生」と「死」をテーマに、先端医療と仏教の関連性、またお互いの今後の取り組みなどについてお話を頂いた。

(文責 編集部)

「十二因縁」

いのちを「授かる」意味

栢木寛照師(以下栢木) 仏教の世界では、人は死ねばお終いという事はありません。死んでも次の世界があり、そしてまたこちらの世界に帰って来ます。即ち過去が「現在」であり、そして「未来」への繋がりや「一日」を捉えて、すべてが一体のものと考えるんです。人生も同じように、誕生し成長を迎え、老いて死に、また世へと繋がりていきます。

お釈迦さまは「十二因縁」という教えの中で「原因」が無いと「結果」は訪れるとは無。全ての事柄は、何らかの関わりを持って生まれて来ます。つまり、先生が産婦人科医になられたのも「因縁」が働いた訳で、また、子供がこの世に人間として生まれてくるという事自体が、ものすごく深い因縁の結果だと私は思っています。

藤井信吾氏(以下藤井) まさしくおっしゃる通りです。私は医学部の学費を都合してくれた義理の兄への恩返しというもので、産婦人科医になる決心を致しましたので、この仕事に誠意深い「縁」というものを感ずます。

「安心」は医療と仏教の共通語

壁を乗り越え、新しいモデルの創作を



両氏の対談の詳細は、後日『比叡の光』にて放映予定

医療と仏教思想の根本

「安心」と「奉仕の精神」

栢木 今の日本では「国民皆保険制度」を始め、国民全員が適切な治療を受けるための制度が非常に充実しています。

藤井 そうです。国民皆保険を始め、現在の日本では、世界で最も恵まれた医療を受けることが出来ます。

なぜ、世界中で日本の医療制度がこれほど恵まれているのかそれは日本の医療の根本には、患者さんに「安心」して治療を受けてもらうという理念が存在しており、我々医師もそれに努めています。そして「安心」の根底には、特に日本の医療の現場では、医師や医療者に「奉仕の精神」が流れています。この「奉仕の精神」が非常に重要なのです。

栢木 仏教においても「安心」と書いて「あんじん」という言葉があり、また、宗祖伝教大師さまは「慈心利他」、自分のことは置いといて、他人の利益になるようにしてあげなさい」という教えを説いておられますが、今の先生のお話を聞くと全くの通り合致しますね。

藤井 そうです。医療と仏教とは、医療は生かされて死ぬまで、仏教は死んでからというように、「死」というラインで勝手に線引きされていますが、医療も仏教の思想も根本は相手に「安心」を与えるという点で共通しています。だから、仏教の皆さんにもっと医療の現場について来ていただけたらいいですね。



北野病院院長・京都大学名誉教授 藤井 信吾氏

また産婦人科医になり、たくさん赤ちゃん誕生の瞬間に立ち合い頂きましたが、どの赤ちゃんも生まれた時から、すでに一人の人間として個性をしっかりと持っています。昔から妊娠するのを「子孫を授かる」と言いますが、まさしく深い「因縁」の結果を現した言葉だと思います。

しかし最近はずっと「授かる」という言葉がだんだん使われなくなってきているんです。いじょうか。今の私たちの間では「子孫を授かる」という時に作られるんだ」となると、まるで自分たちで命を調整するような考えを持始め、生命に対する畏れや愛を失いつつあるように思えます。

栢木 受精から出産までの間、子どもは約40万倍の大きさに成長すると言われています。お母さんのお腹の中というのは、まさに神秘的な世界ですね。

藤井 子どもは母親の胎内で、色々な種類の音を聞いたり、母親が笑ったり怒ったりする感情でも敏感に感じ取っています。子どもを授かる「一」は、それ神秘的な事なんです。しかし授かった瞬間から当然責任も発生します。そのことを物質的な捉え方ではなく受け取らず、責

心を与えるという点で共通しています。だから、仏教の皆さんにもっと医療の現場について来ていただけて、患者さんに「安心」を与えて頂く要素が必要ではないのかと思うんです。

栢木 それは非常にありがたい事です。以前私が病院に入院している師僧をお見舞いに訪れた時にエレベーターで待っていると、看護婦さんが来られて「霊安室は地下ですよ」と霊安室に案内されたんですよ。笑い話みたいですが、日本では、坊さんが何人かで病院へ行くと、やっぱり縁起悪く思われてしまっているんです。

藤井 そがまた残念な所なんです。

しかし我々は、患者さんに「安心」を与えるためにその壁を乗り越えなければならぬんです。医師や看護婦さんは、患者さん全ての方の不安を拭き去ることは時間的にも知識的にも難しい。だから私はもっと医療の現場には坊さんを入らせて来てほしいと願っているんです。

栢木 そう言って頂けると私も入って頂きやすいし、ありがたいです。

確かに海外の病院には、必ず教会が設けられていて、牧師さんが常駐していますね。日本では坊さんは霊安室に案内されますが……

しかしかれは、我々が宗教家として努力が足らない結果なんです。それは反省せんと。我々もこの壁を乗り越えようと思ってるために心の平安を取り戻し、真の努力をしないといけない。そのために病院にも受け入れて貰える扉を開いていただけたらいい。

藤井 良い取り組みで良い動きが出れば、必ず取り入れて行くというのが日本の良い所です。「安心」は、医療と仏教における共通語なんです。ぜひそういう新しいモデルを協力して創っていくじゃないですか。

天台宗宗議会議長・金乗院住職

栢木 寛照師



昭和21年(1946年)滋賀県甲賀市出身。昭和43年得度。昭和52年滋賀教区金乗院住職拝命。平成23年天台宗宗議会議長就任。

現在、延暦寺・山慈光院住職・比叡山麓三寶延住職・天台宗浄光院住職。社団法人三寶延国際交流協会会長。北マリアナ連邦サイパン市名誉市民。北マリアナ連邦名誉大使。各局のテレビ・ラジオ等にレギュラーとしてバラエティ番組から宗教番組まで出演し幅広い活動している。

昭和19(1944年)広島県福山市出身。京都大学医学部卒。医学博士。信州大学医学部産科婦人科学教授。京都大学大学院医学研究科器官外科学婦人科学専攻教授を勤めた後、平成21年には独立行政法人国立病院機構京都医療センター病院院長に就任。平成23年の現職。

現在、日本産科婦人科学会名誉会員。日本婦人科腫瘍学会名誉会員。国際婦人科がん学会前理事長

任の所在を有耶耶耶にしてしまっている人が増えてきているのが残念です。「命を授かった」という本当の喜びをもっと持たないといけないと思えます。

栢木 私は手由に任された人だから、ほんの少しの偶然が重なって誕生したこの星に、神の存在というものを確信させるをえないと聞いたことがありました。

人間の生命誕生においても、お母さんとお父さんの力だけでは無く、何かほかの力が働いているように感じています。この世に生まれた」とと自体に感謝しなければいけないと思っています。

藤井 私たちは奇跡のような確率でこの世に生まれてきました。でも一生で出会える人間の数と云うのは余り少ないです。その中で、何らかの「縁」を持つ人と人が出会い、その結果としての世に生まれるのですから、もう少し「絆」と言わく人間関係」を大事にしていくことが必要ではないかと思えます。児童の虐待についても、そういう意味の愛情を注いだ子どもに注がれるからか抑えられるのではないのでしょうか。

栢木 私たちは奇跡のような確率でこの世に生まれてきました。でも一生で出会える人間の数と云うのは余り少ないです。その中で、何らかの「縁」を持つ人と人が出会い、その結果としての世に生まれるのですから、もう少し「絆」と言わく人間関係」を大事にしていくことが必要ではないかと思えます。児童の虐待についても、そういう意味の愛情を注いだ子どもに注がれるからか抑えられるのではないのでしょうか。

みんな「死なない」と思っている

藤井 長い医師生活のなかで感じるのは「命はコントロール出来ない」という事です。本当に軽い病気で亡くなってしまつたおられる方は、「よく生きられたな」と思はれた大きな事故に遭われた。またまた医療施設の整った病院の近くで事故に遭ったおかげで、「命を取り止めた方々にたくさん遭遇します。」

先程の手由飛行士の話ではないですが、本当に何か見えない力「神の存在」を認めざるを得ない経験を何度もしました。

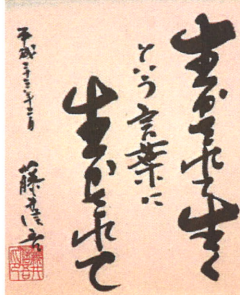
また、昔から患者に対して医師が告知する「とは無かったですね。医師はがん患者に対して「治りますよ」と、ウソを言っています。何度何度でもウソをついて、患者さんの信頼関係を無くしてきて危険になって来ます。患者さんはやはりきれいな気持ちで医師にぶつけてくる。しかし、みなさん「くそ」な週間くらい前に必ず必ず「先生ありがた」と言ってくれます。私は、今日命があることが一番大事で、そして今日を力一杯生きたい、おらずと明日に繋がりて行くと考えています。患者さんたちも死期を感じるようになってくると、きつと何かさういふことを悟らせる力が働いたのだろと感ずます。

栢木 闘いが死期を悟ると、側主のもとを離れ、自然の中に帰る安らかに死を迎えるということがあるが、人間も死期を感じ取れるようなことがあるのでしょうか。

藤井 私はあると思います。

だから私たちが、命の尊厳と共に、「命が果てる」ということをもっと意識しなければならぬと思えます。

今の日本には「ひょっとして」をみな自分には死なないと思っているのではないのか」と思うことが多々あります。核家族化や高齢化社会を迎え、若者をめつともたちが「死」と直面することが多くなって来ているんです。人はいつか死ぬというのを教えるはタフに視されているが、特に現状の日本では、子ども「死」というものをさういふように教えるべきだと思えます。そしてそれが出来るのは宗教者の方かなのです。ですから、我々医師は、仏教の先生方と共に、「死生観」の観念で、「生きる」ということ、「死ぬ」ということの両面を社会に対して啓蒙して行かなければならないと思っています。



藤井氏揮毫による色紙

生かされて生く

栢木 今日先生のお話を伺って我々宗教者も、もっと社会に対して貢献する責任があることにあらためて気付きました。

しかし、普通医療者さんや云々の方は学者というが研究まで自分の世界に浸つてしまつて、あまり我々のような宗教者と関わりを持たたがらない人が多いので、先生に我々宗教者と先頭を切って交流を深められよう共に、医師のみならず、北野病院の経営者という顔も持つちで多忙な生活を送られています。

藤井 私が子どもの頃から好きな言葉に「生かされて生く」があります。これは人は自分ひとりで生きていくのではなく、世間から生かされているのだから感謝を忘れてはいけない」という教えなんです。私は大人になるにつれて、この言葉のように自分が生かされていることに気付きました。だから今では「生かされて生く」という言葉に生かされて」という言葉を座右の銘にして、世間に生かされていることの恩返しをしようと思っています。

そして医療には「奉仕の精神」が極めて大事だと思っております。しかし働く医師たちも人間ですから、心ゆとりがなければいけません。したがって奉仕が出来ません。それでは患者さんに本当の安心を与えられない治療は出来ません。だからそのために、経営者として医師や看護婦たちの働く環境を整備しなければいけないと考えております。

また、医療というのは自分が「これだ」と思ってしまったら、マンネリ化してステップしてしまふんです。ですから常に医師は「一歩」進歩しなければいけないんです。その進歩の中には必ず「夢」がなければいけないんです。

みんな医療者の「夢」を追い求め、病院全体の医療レベルを引き上げていくことが私の夢なんです。